

## 飛行機事故の 悲しみを乗り越えて

今から35年前、1978年3月25日、建設省（当時）九州地方建設局で働いていた朝倉肇さんのもとに一本の電話が入った。土曜の昼下がり、その日は午前中で仕事を切り上げ、友人たちと談笑しているところだった。「ビルマ（ミャンマー）で飛行機が墜落したぞ！」

ただ海外で飛行機事故が起きただけで、わざわざ連絡が来るわけではない。朝倉さんはサーッと血の気がひいていくのが分かった。そこに乗っていたのは6人の日本人。その一人が、朝倉さんの元上司の国広哲男さんだったのだ。残りの5人は、建設省を含む日本の政府関係者たち。まさにミャンマーで始まるようになった、橋の建設支援の調査団のメンバーだった。「国広さんは人望も熱く、周りからの信頼も大きかった。私たちのシヨックも相当なものでした」と、当時建設省国際課でミャンマーへの協力を担当していた小室肇さんは振り返る。

ミャンマーの人々にとって、日々の生活の「恵み」である川、国の中央を縦断するエーヤワディー川をはじめ、日本の約1・8倍の国土にはいくつもの河川が流れている。そこで必要となるのが、橋だった。

しかし当時のミャンマーには、安全で丈夫な橋を造る技術も資材もない。一方で、70年代から瀬戸大橋など橋の建設ラッシュで盛り上がりを見せていた日本。そのノウハウをミャンマーの技術者にたたき込んでほしい。現地政府から、そんな依頼があった矢先の事故だった。

ミャンマー側も2人の技術者の命が奪われた。8人の精鋭を失い、もはやこのプロジェクトは続行が困難かとも思われた。しかし。「国広さんたちの思いを受け継ぎたい」と、建設省の職員が次々と手を挙げた。もちろん、朝倉さんたちも。約半年遅れでプロジェクトがスタートした。

## 橋がつないだ 両国のきずな

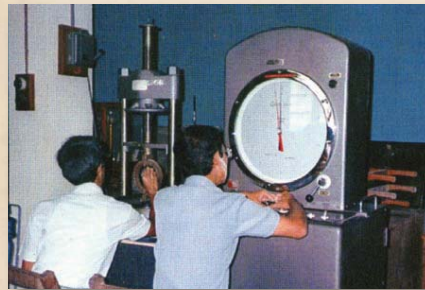
まずはミャンマー建設省などの技術者に、講義形式でみっちり理論を指導した。「日本人専門家はとにかく厳しかった。思いがぶつかり合って、授業中は熱い議論になることもありましたね」。そうなつかしそうに話すのは、ハン・ゾー前ミャンマー工学会会長。公共事業庁に配属されていた彼は、懸命に技術を学ぼうとしていた。「温厚な人柄、何事にも真摯に向き合う姿はみんなから慕われていました」と朝倉さんは話す。

理論が身に付いたら、その次は「On the Job Training」。講義で学んだことを実践し、ヤンゴン郊外に全長300メートルの「ツワナ橋」を建設しようというのだ。「迷ったらとにかく現場に行く。そうすると自然と答えが見えてくる。これも日本人から学んだことです」とハン・ゾーさん。85年、両国の技術者たちの思いが一つになり、ついにツワナ橋は完成にこぎつけた。それは、日本との友好の懸け橋のようにも見えた。

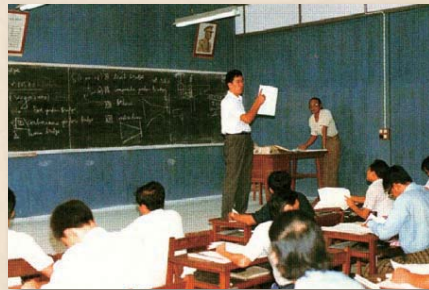
続いて日本とミャンマーは、新たにひとつ「ツワナ橋」を建設することに。しかし、88年の政変が状況を一変させた。混乱の中でプロジェクトは一時中断。無念にも、日本も支援を続けることが難しくなった。



ツワナ橋の建設現場。ミャンマーの技術者たちは理論を実践で生かす



測量などに必要な機材の使い方も手取り足取り指導



日本人専門家が教壇に立ち、橋の建設のノウハウを一から伝える



ヤンゴンの日本人墓地にある飛行機事故による殉職者の慰霊碑。今でも遺族や同僚が弔いに訪れている



ミャンマーと日本の技術者が力を合わせて建設したツワナ橋

## その思いを橋にかける

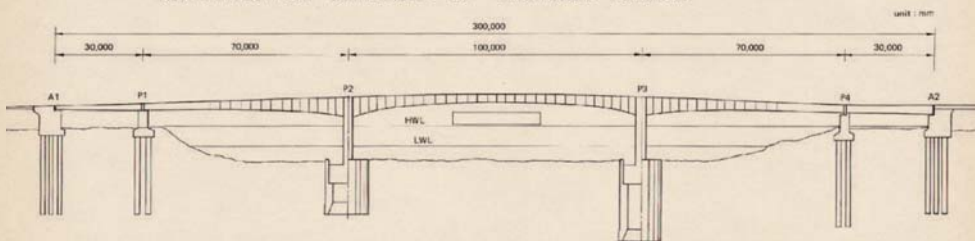
眼前に延びる河川にかけられたいくつもの橋は、ミャンマーの技術者たちの汗と涙の結晶。その裏側には、日本人が伝えた技術と思ひも秘められていた。

このまま終わらせるわけにはいかない。日本人の技術者魂を受け継いだハン・ゾーさんが自ら指揮を執り、それまでに習得した技術をフルに活用し、設計から施工までほとんど自力でツワナ橋を建設。公益社団法人土木学会が優れた橋梁プロジェクトに授与する「田中賞」という栄誉を勝ち取った。その後、他国の支援を受けず、独自に若手技術者の人材育成を進めたミャンマー。全国各地で橋の建設が進められ、その知らせは日本にも届けられた。

そして時はたち、2005年。ミャンマーに変革の光を期待しつつ、かつて志を共にした日本の建設省OBの有志が再び集った。もう一度、みんなであの地に橋をかけ、道路を造りたい。そこで誕生したのが、認定NPO法人国際インフラ調査会。理事長は小室さん、朝倉さんは副理事長としてメンバーに加わった。彼らと国境を超えて交流を続けてきたハン・ゾーさんは、04年には公共事業庁長官に就任。日本の古き友人たちの団体立ち上げの話を聞き、「ぜひまた一緒に仕事をしましょう」と感無量の様子だったという。

そして今、JICA草の根技術協力事業を通じて、彼らが挑戦しているのがエーヤワディー川周辺の道路整備。サイクロンなどの被害を受けやすいこの地域で、行政と市民が緊急時に協力して道路の修復などを行えるよう、マニュアルづくりや訓練を実施している。「インフラは国づくりの柱。これからの地道にミャンマーを支援していきたい」。30年の時を超えて集まった、両国の技術者たち。みんなまだまだ現役。第2の人生をかける覚悟だ。

CONSTRUCTION SCHEDULE OF THUWUNNA BRIDGE



ツワナ橋の設計図。きめ細やかな設計技術が日本人から受け継がれた



# History

次世代への財産